ハングルと知

―知の原理論を共にする

講演要旨

野間秀樹 先生
（明治学院大学・国際教養大学 客員教授）

2014年11月9日

回「ハングルは今も続く知の革命」

「ハングルと知」という主題で何を問うのか、最初に核心を申し上げたいと思います。

ハングルというのは、過去の記憶であるばかりでなく、現在の事実であり、未来への展望であるということです。ハングル＝訓民正音の誕生は、過去の偉大な事件として終わるものではなく、私たちが共にし得る、今、ここの〝知〟なのです。知は言語にし、かたちにして初めて共にすることができます。今、共にして育むことができる知として、私たちがそれをどこまで言語化し得るかが問われています。

そして、訓民正音の創成と発展は、言語をめぐる巨大な知の革命であり、それは今なお続く永続的な革命であることを見落とせないのです。

回韓国・朝鮮の知

『韓国・朝鮮の知を読む』という本を出版しました。日本と韓国の知識人140人の方々から、「韓国・朝鮮の知」を知るための本、或いはそれに関わる本を数冊ずつ挙げていただきました。これには、そうそうたる先生方が加わってくださいました。

韓国の文化は、多くの分野において日本で既に高く評価されています。とりわけ、美術やスポーツ、音楽などの分野では非常に高い評価です。一方、言語が関わる分野ではなかなか難しいのが現実です。

日本の知識人に、韓国の知について問うと、しばしばことばに詰まります。韓国・朝鮮の知に関わる本を問うと、「確かにあるとは思うけれども、私はよく分からない」となるのです。たとえば「昔、李退渓（イテゲ）（※16世紀朝鮮王朝の儒学者）という人がいたような気もする…」となるわけです。もし、世界の知に関わる本を問えば、たちどころに10冊は挙がるでしょう。ところが、韓国・朝鮮の知の本というと挙げることが難しくなるわけです。

知にあっては、語られないものは存在しないと同義です。つまり、文化として享受したり、感性で感動したりする対象としては圧倒的な評価を得ていながら、共に苦闘し、悩み考える対象としては、日本において韓国・朝鮮の知というものがこれまで存在しなかったということです。

皆さんはこれでいいですか。私は嫌です。ですから、どうしてもこの本を作らなければいけなかったのです。

回言語を大切に扱う

私たちがものを考えるとき、前提としてことばをきちんと見つめ、大切に扱わなければいけません。このとき、重要なことは言語と文字は違う〝平面〟にあるということです。ハングルというのは文字の名称であり言語名ではありません。韓国語＝朝鮮語が言語です。ですから、違う言語をハングルで書くこともできるし、韓国語＝朝鮮語をローマ字で書くこともできます。それは、言語と文字が異なる〝平面〟にあるからです。

世界には少なくとも5千～8千の言語があるだろうと言われて